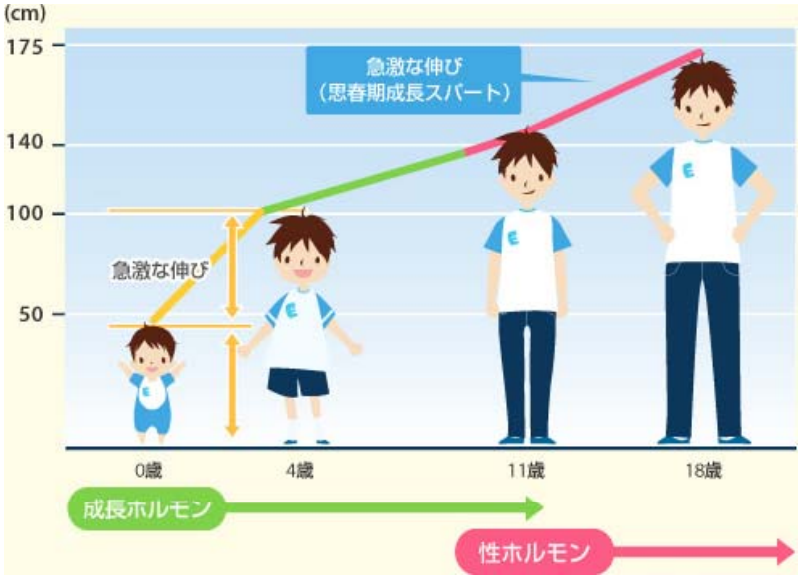
「高大接続」に関する問題提起

NPO法人NEWVERY 理事長
日本中退予防研究所 所長
山本繁

「新しいとても」を若者に
NEWVERY

キーワード①

ゴールデンエイジ



平野文科大臣からの諮問

大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について

（理由）

グローバル化、情報化、少子高齢化など社会構造が大きく変化し、先を見通すことの難しい時代にあっては、生涯を通じ不断に主体的に学び考える力、予想外の事態を自らの力で乗り越えることのできる力、グローバル化に対応し活力ある社会づくりに貢献することのできる力などの育成が特に重要となる。

このような力は、学校教育においては、各学校段階における質の高い教育と相互の有機的な連携を通じて育むべきものであり、そのために多くの関係者が努力を重ねている。

しかし、特に高等学校教育と大学教育との接続・連携については、大学入学者選抜制度の在り方を含め様々な課題が指摘されており、国民からの期待に十分には応え切れていないと言わざるを得ない。

高等学校教育、大学入学者選抜、大学教育は相互に密接に関連し合うものであり、そのいずれかに責任を帰すことによっては問題を解決することはできない。

我が国の将来を担う生徒・学生が、これからの時代に求められる力を確実に身に付け、それぞれの持つ可能性を最大限に伸ばすためには、高等学校教育、大学入学者選抜、大学教育の在り方を一体としてとらえ、その円滑な接続と連携のもとに、高等学校教育の質保証、大学入学者選抜の改善、大学教育の質的転換を進めることが喫緊の課題となっている。

このため、国内外の様々な教育の質保証のための仕組みや構想、高等学校教育及び大学教育に関する課題についての検討状況等を踏まえつつ、特に次の事項について、高等学校及び大学の関係者を含め、早急に議論を深める必要がある。

・ 大学入学者選抜の改善をはじめとする高等学校教育と大学教育の円滑な接続と連携の強化のための方策について

大学入学者選抜の改善の目的

「これからの時代に求められる力を確実に身に付け、それぞれの持つ可能性を最大限に伸ばす」

「これからの時代に求められる力」とは？：

1. **生涯を通じ不断に主体的に学び考える力**
2. **予想外の事態を自らの力で乗り越えることのできる力**
3. **グローバル化に対応し活力ある社会づくりに貢献することのできる力　など**

これからの時代に求められる力

専門性というよりも、よりジェネリックな能力が求められている

諮問の中での表現	具体的なスキル・コンピテンシー
①不断に主体的に学び考える力 ②予想外の事態 ③自らの力 ④乗り越えることのできる力 ⑤グローバル化に対応 ⑥活力ある社会づくりに貢献	①決断力、技能習得能力、思考力 ②急激な環境変化への適応力 ③基礎学力、専門知識・専門技能 ④持久力、ストレス耐性 ⑤語学力、自国理解、異文化理解 ⑥イノベーション、バイタリティ、巻き込み力、倫理観

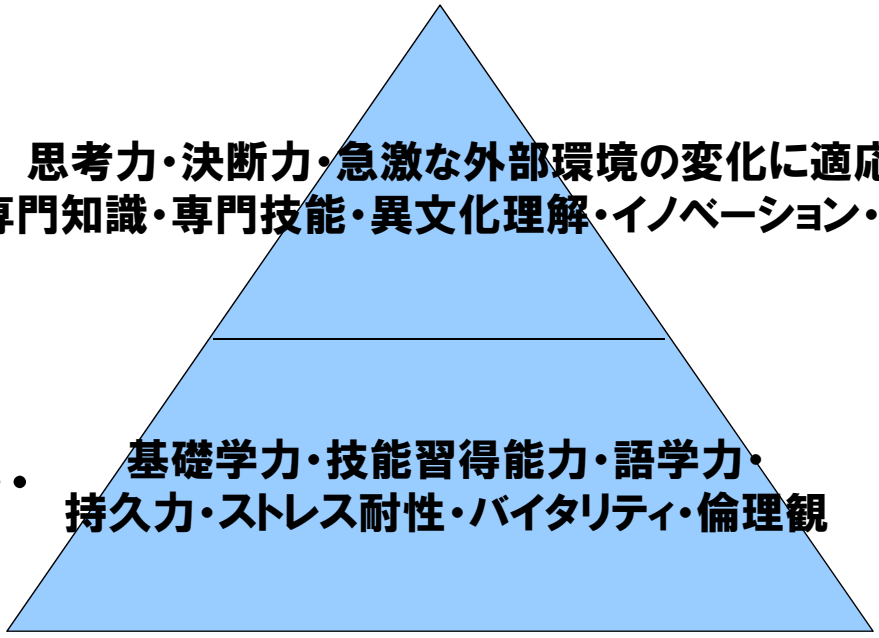
多くは大学入学以前に身に付ける能力では？

従来の考え方からの転換

高校と大学は明確に役割分担している。

（例えば）

大学・・・ 思考力・決断力・急激な外部環境の変化に適応する力・専門知識・専門技能・異文化理解・イノベーション・巻き込み力



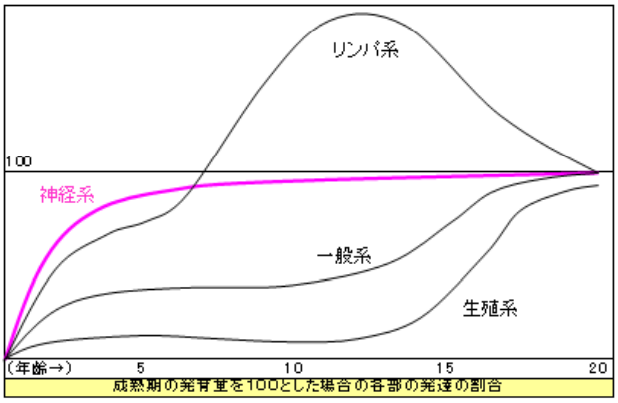
高校以前・・・ 基礎学力・技能習得能力・語学力・持久力・ストレス耐性・バイタリティ・倫理観

それぞれの能力育成にゴールデンエイジが存在するのではないか？

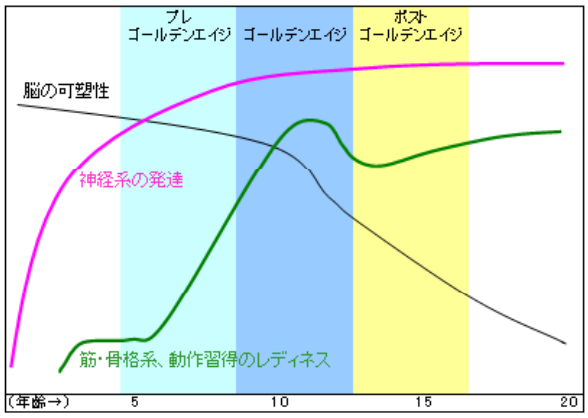
発育発達から見たゴールデンエイジの概念

さまざまな神経回路が形成されていく大切な時期のうち、特に9歳～12歳頃の年代は「ゴールデンエイジ」と呼ばれ、サッカー以外のスポーツでも重要視されている

スキャモンの発達曲線



ゴールデンエイジの概念

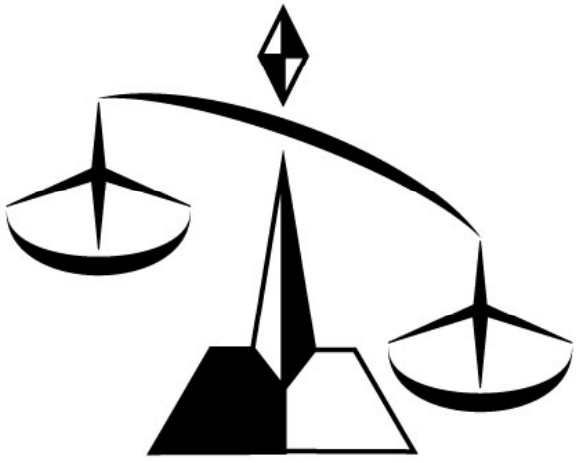


図引用：http://mf10.jp/junior/jijyou/growth.htm

どの能力をいつ重点的に伸ばすのか、
発育発達の観点を取り入れた教育課程（K-16）の再構築が必要では？

キーワード②

高校生の学びの動機付け



大学受験資格試験は必要か

- 大学と受験生の需給バランスが変わった
  - 大学定員＞受験生
- 高校は、大学受験を学びの動機付けに活用してきた
- 大学の選抜性が下がれば下がるほど、動機付けも低下
- 18歳人口は今後も下がり続ける
- 市場のメカニズムに頼る限り、おそらく今後も高校生の学習時間は下がる一方
- 高校生の学びの動機付けに大学の選抜性が必要なら、市場のメカニズムに影響されない仕組みが求められる
- 例えば「大学受験資格試験」
  - 高校卒業試験ではなく、大学・専門学校入試の受験資格

何を高校生の学びの動機付けにするのか、現実的な検討が必要？

（補足）大学と受験生のマッチング

- 高校教育、大学入試、大学教育のそれぞれの多様化により、大学入学段階でのミスマッチが増加
  - 多様化のポイント：学力、ラーニングスタイル、興味・関心、ソーシャルスキル
- 18歳人口の減少により多くの大学が定員割れに（私大の約4割）。今後、行き過ぎた大学広報がミスマッチをさらに助長する恐れも
  - 安易な方法で志願者を増やそうとすれば、八方美人な広報（「誰にとっても良い大学」はあり得ない）や実態とかい離した広報が行われることにも（既に訴訟事例も）。課題は

    （１）各大学におけるマーケティング（セグメンテーション・ターゲッティング・ポジショニング）の徹底

    （２）質・量・透明性の観点で十分な教育情報の発信、大学体験機会

従来のマッチング方法はもはや限界に。改善のポイントは
（１）選抜方法（２）入学前・後教育（３）大学広報における情報の対称性

「未来の大学教育」との接続

高大接続のあり方を議論するには、小学校から大学までの16年間の学び(K-16)による最終的な教育目標の共有がまず重要で、そして、現在起きている課題に、ではなく、5年後10年後の大学教育を想定し、未来の大学教育への接続を意図した改善策を構想しなくてはいけないと考える。

本当のところ、未来の大学教育は、一体どうなるのだろう？

学生の中退防止

山本繁

■はじめに

NPO 法人 NEWVERY の山本繁と申します。本題（「学生の中退防止」）に入る前に、まずは簡単に、NEWVERY ならびに日本中退予防研究所の紹介にお付合いいただければ幸いです。

NPO 法人 NEWVERY は、2002 年 3 月から活動している教育 NPO になります。当初は引きこもりやニート、不登校、フリーターといった、社会的弱者に転落した若者や、その予備軍を支援する活動を行っていました。活動開始当初は全員がボランティア活動でしたが、2006 年に私が当時勤めていた教育系の企業を辞職し、専従職員となることで、社会的企業への転換を図りました。ですから、本格的にはそれほど長く活動しているわけではありません。今年で設立 11 年目、社会的企業に転換して 7 年目になります。

しかし、早くも 2008 年に活動の方針を大きく変えざるを得なくなりました。その主な原因は、世界金融危機、いわゆるリーマンショックでした。

日本だけでなく世界的に景気が後退局面に入り、一度社会的弱者に転落した若者への支援の効果が以前に比べ期待できない状況になってきました。みな、ドロップアウトした若者たちのことどころではなくなってしまったのです。特に企業は目に見えて余裕がなくなりました。派遣切り、内定切りという言葉をみなさん覚えているかと思います。 また、数年間の若者支援活動を経て、彼らをニート・フリーターになってから、事後に、対症療法的に支援することに限界を感じ始めていました。

2006、7 年当初の私たちの問題意識は「どのようにすれば社会的弱者に転落した若者たちを、もう一度社会に戻すことができるのか？」ということでしたが、「どのようにすれば、若者たちの社会的弱者への転落を未然に防ぐことができるのか？」というふうに問題意識を変えざるを得なくなったのです。

次に、なぜ私たちが高等教育機関からの中退にフォーカスを始めたのかについて、お話しさせてください。

そこで、2009 年 3 月に日本中退予防研究所を設立し、まず大学・専門学校からの中退者を減少させようという取り組みを開始しました。

2008 年に、かなりの数の学校経営者にヒアリングをお願いしました。テーマは、退学抑制のために、現在どのような取り組みを行っているのか、何が課題なのか、NPO 等との協働の可能性について等です。

そういう中で、退学抑制のために、もし調査ではなく本格的な活動を開始するなら自分たちと一緒にぜひ取り組まないか、というご提案をいただいて、2009 年からは実際に退学抑制の活動を教育現場で進めてまいりました。現在、4 大学・1 専門学校グループと退学抑

制に関連する活動をともにしています。

■中退とは何か？

さて、大学・専門学校の中で取り組みを進めるうちに、分かってきたことがありました。まずは「退学とは何か？」ということです。

図 1 は大学の入口から出口までを簡単にまとめたものですが、受験生から入学者を選抜し、カリキュラムや新たな学習・生活環境に吸収していく際、上手く吸収できない学生が発生します。また、カリキュラムにいったん吸収できても、今度はカリキュラムを駆け上がっていく際に、そこから逸脱し、ドロップアウトしていく学生が発生します。

前者のような学生に対しては、より多くの学生をカリキュラムや環境に吸収できるように、そのデザイン、人の配置等を工夫することで退学者を減らすことが可能になります。また、タイミングよく学生支援の手が行き届き、退学までにカリキュラムに適応できない要因を取り除くことができれば、退学を未然に防ぐことができます。

後者のような学生は、多くの場合、カリキュラムを駆け上がれていない、別の言い方をすると、あまり単位を取れていないか、カタチ上は単位を取得できていても学びが形骸化していて、成長を実感できていないケースがほとんどです。このような場合、カリキュラムを工夫するとともに、カリキュラムを駆け上がっていく学生に伴走する教員の教授法や支援法の開発が必要になります。しかし、それでもカリキュラムから逸脱する学生は必ず発生しますから、そのような学生をいかに早期発見し支援するのか、ということが重要なポイントになります。

なお、単位の取得状況から見ますと、前者は入学当初から低単位であるケースが多く、後者は 1 年後期以降に失速し低単位になるか、取得単位数では問題は現れず、ある日突然退学を申し出ます。

これまでの論述を少し専門的に説明しますと

① アドミッションポリシーとカリキュラムポリシーの接続
② カリキュラムポリシーの実現度（カリキュラムポリシーと実際のカリキュラムをかい離させないこと）、および学生の興味・関心・学力・ソーシャルスキル等とのマッチング
③ 教職員の教授法・支援法の開発
④ 修学支援における早期発見・早期支援

が中退を防ぐポイントになります。

ところで、最近ユニークな事例を実際に目の当たりにしました。アクティブラーニングの導入によって中退率が跳ね上がっていたケースです。その大学ではジェネリックスキルの養成を目的にアクティブラーニングを導入していたのですが、アクティブラーニングを

必要とする学生であればあるこそ、アクティブラーニングに対する苦手意識や学生間のコミュニケーションが実際に上手くいかないことから、カリキュラムから逸脱してしまっていたのです。これはカリキュラムと学生のソーシャルスキル等とのミスマッチです。

今後、全国の大学でアクティブラーニングが導入されるようになるかと思いますが、一方的にアクティブラーニングを導入するのではなく、学生理解を深めた上で、チューニング機能を働かせた導入方法が望まれます。学生理解を深めるには、質の高い学生情報と、学生情報や学生に対する教員側の読解力の両面が求められます。教学 IR や FD の役割は、今後さらに大きいと言えるかもしれません。

今敢えて少し脱線しましたが、個々の大学・学部により、優先的に取り組むべき課題は異なります。入学する学生、教育内容や現状の取り組みが大学・学部ごとに異なるからです。例えばある中堅私大の主要学部における主な中退理由は以下の通りです。

① 文学部：歴史・文学への興味・関心が湧かない、怠学（教育負荷が軽いため）
② 法学部：法学・政治学への興味・関心が湧かない、怠学
③ 経営学部：怠学、ソーシャルスキル不足（一人暮らしが出来ないなど）
④ 経済学部：基礎学力不足（特に数学)、経済学への興味・関心が湧かないソーシャルスキル不足（一人暮らしが出来ないなど）
⑤ 理系全般：基礎学力不足（理数科目)、ソーシャルスキル不足（一人暮らしが出来ないなど）

「怠学」というのは、大学が学生にかける教育負荷が軽いため、学生が緊張感や集中力を失い、怠けてしまっているケースです。もう少し柔らかい言い方をすると、大学がラクすぎてやる気をなくしまった、堕落してしまった、といったところでしょうか。

また、別のある私立大学ではキャリア不安が中退の最大の理由になっていました。

目的意識があいまいなまま大学に入学して、2 年の後期以降に「自分が本当にやりたいことは何か？」自問自答した結果、カリキュラムへの不適応が顕在化し退学する学生が急増する大学もありました。

■中退理由の類型化

日本中退予防研究所では、学生の中退理由を以下の 3 類型に分類しています。

① 学生と、大学が提供している教育内容・教育方法とのミスマッチ
② 個々の学生が抱える課題や事情
③ キャリア不安・将来不安と大学卒業価値の低下

順に背景と対策を見ていきます。

教育内容・教育方法とのミスマッチが起きている主な背景は「学生の多様化」です。学生の興味・関心、生育・学習歴、アカデミックスキル・ラーニングスタイル等が以前に増

して多様化し、従来のカリキュラムや教授法で吸収できない学生が増加しています。対策のポイントは、「学生理解」をまず深めることです。従来とは違った学生たちを深く理解し、学生の変化に対する柔軟かつ迅速な対応をすることです。具体的なツールは、IR、カリキュラム改革、FD、SA、学習サポートセンター等です。

個々の学生が抱える課題や事情の背景は、ソーシャルスキルの低下、発達障害、経済的困窮などによります。コミュニケーション能力が低く学内で孤立する学生、逆に人間関係で問題を起こす学生、また、一人暮らしができずに昼夜逆転した生活から抜け出せない学生などがこのパターンに該当します。経済的理由による中退は、全中退者の 10%程度ではないかというのが日本中退予防研究所の見解です。対策のポイントは、大学の「課題解決能力」の強化です。問題発見・問題解決のスピード・精度を向上させ、いかに早期発見・早期支援を実現するかということです。また、学内のコミュニケーションデザインを再構築することによって問題を未然に防ぐことも一部可能です。クラス制の導入などはそのツールです。一方、昼夜逆転は学生本人による自力での解決は意外と難しく、問題発生後、学生寮等への転居を勧める方が現実的です。

近年増加傾向なのがキャリア不安・将来不安と大学卒業価値の低下です。主な背景は、就職氷河期、グローバル化、新卒一括採用・終身雇用の終焉、女性の社会進出、少子高齢化と社会保障不安です。対策のポイントは、親世代のキャリア観からの脱却を促すキャリア教育、キャリアデザイン力の強化、キャリア形成の機会提供、卒後も含めたキャリア支援の強化等です。

ただ、この 3 類型のどれか一つで中退するというわけではなく、多くの場合、主因はあるものの、かなり複合的と言うことができます。かといって、全ての要因を取り除かなければ中退防止できないというわけでもなく、主因を取り除くことで、中退防止は可能なケースがほとんどです。

■学生の中退防止

それでは、どのようにすれば学生の中退防止は可能になるでしょうか。以下に、私見を述べたいと思います。

まず、個々の大学・学部で中退の要因となっている課題をできるだけ正確に把握することが重要です。教学面での IR（Institutional Research）はそのための手法の一つですが、そうすることで課題と対策のマッチング精度が向上し、より手ごたえのある取り組みにすることができるようになります。

例えば

① 自校にはどのような学生が入学してきているのか？

(ア) 出身高校の偏差値、高校時代の各教科の成績・評定平均・欠席率

(イ) 入試形態、入試成績
(ウ) 各種プレースメントテストの結果
(エ) 将来のキャリアイメージ

② カリキュラムとの接続において何が本当の課題になっているのか？
(ア) 誰が、なぜ、カリキュラムに適応しない・できないのか？
① 中退した学生に関する各種記録・データの分析
1. 履修行動
2. 課外活動
3. セメスター毎の単位取得状況
4. 修学支援記録
② 在校生へのフォーカスインタビュー
③ 教職員へのフォーカスインタビュー
④ 退学者の追跡調査

③ 自校ではどのような学生が退学しやすく、いつどのような兆候を発するのか？
(ア) 退学者の傾向分析
(イ) 学生満足度の各項目との相関分析
(ウ) 各セメスター毎に発生するシンドロームの時期・内容の把握

このようなことを把握・発見するツールを日本の高等教育機関に取り入れてもらうことが、まず基本となります。

実際に、上記の実施を通じて以下のようなことが可能になります。

① 退学リスクの高い学生グループを入学前に特定
② 導入した初年次教育の成果と課題
③ 年間を通じたシンドロームの発生時期や内容
④ 学生満足度調査の各項目と中退率との相関関係

また、エビデンスが揃うことで、多くの人の納得を引き出すことが可能になります。「納得感」は直接民主主義が強く働く大学組織が対策を実行に移す上でとても重要な要素になります。

■今後の課題

最後に今後の課題を提示して終わりにしたいと思います。

図 2 は、教員と学生のやりとりを些か工学的に、かつ簡略化したものです。

教員が学生に「入力」すると、何かしらの「出力」が生まれます。「入力」とは「教育」であり、「教育」は仮に教育内容と教育方法に因数分解できるものとします。「出力」とはテスト結果やレポート、学生によるプレゼンテーション、授業態度や出席率まで含めても

良いかもしれません。

さて、ここにある専任講師がいるとします。彼が大学で授業を持ち始めたところ「自分は「正しい入力」をしているはずなのに、出力結果が間違っている」と言い始めました。しかし彼の同僚は誰もその言葉に反応してくれませんでした。

そこで彼は「次に正しそうな入力」に変えて、もう一度入力を行いましたが、やはり望んだ出力結果は得られませんでした。何度も何度も入力を変えた結果、やはり望んだ出力結果が得られない。やがてこの専任講師はこう思うようになりました。

「この機械は壊れている。」

その後彼は順調に准教授、教授へと昇進していくのですが、新任講師だった頃のように入力を変えてみることもなく、いつしか「壊れた機械」に対して「正しい入力」をし続ける教員になっていました。彼は心の底から「学生はバカだ」と思い、同僚との飲み会どころか学生を前にしても「最近の学生はバカばかり」と言います。

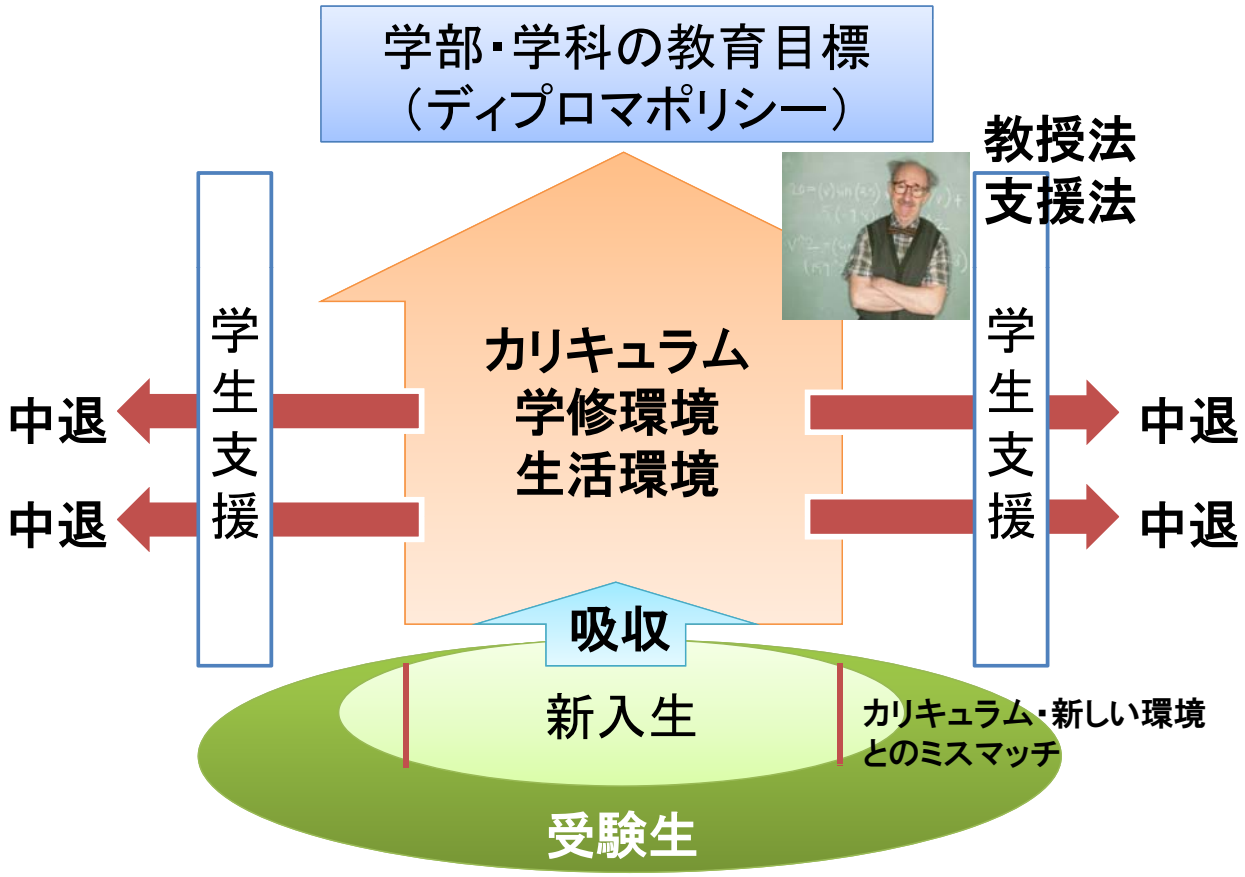
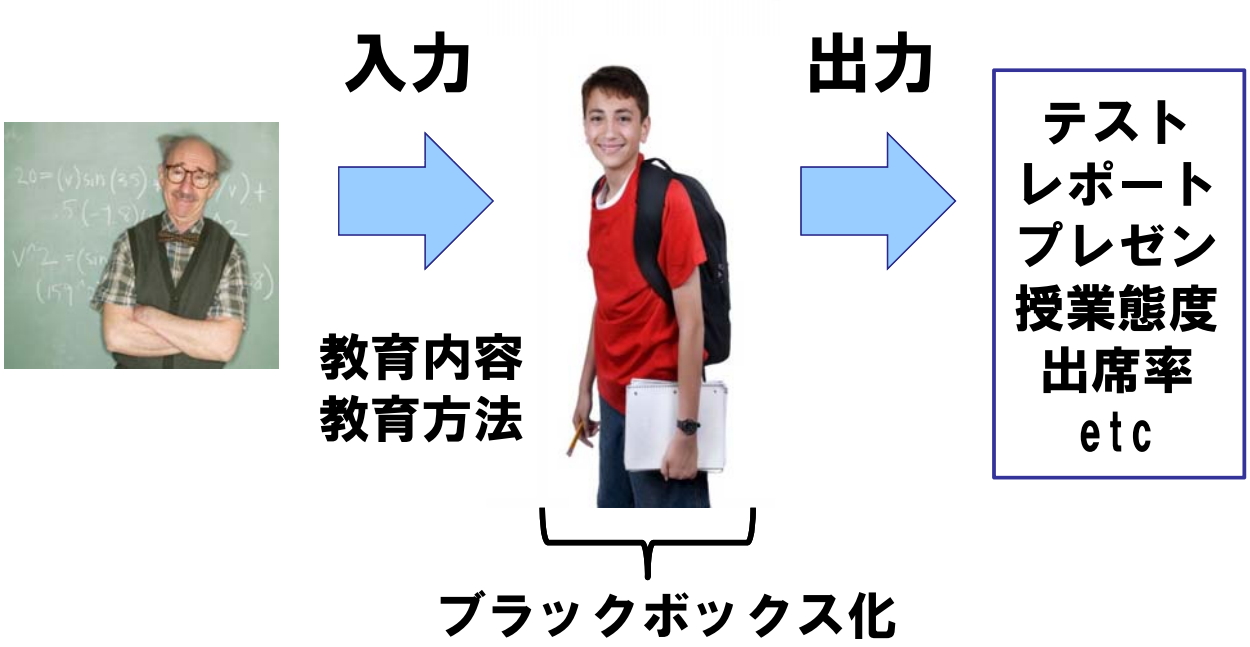
「学生がバカ」というのは、「この学生は壊れている」ということです。確かにいくら入力を変えても、望んだ結果が得られないのなら、こう思っても仕方なかったかもしれません。

しかし、状況をよく観察してみると、この専任講師は教育内容や教育方法にばかり目が奪われ、変容した学生のメカニズムを解明しようとはしていませんでした。学生が「ブラックボックス化」していたのです。本来は、新しいタイプの学生のメカニズムをまず解明することが重要です。その上で、望んだ出力結果から逆算した入力は何かと考えるべきだったのです。

学生を変容させうる HOWTO はいくらでもあるのですが、ブラックボックス化を乗り越え深い学生理解に到達しない限り、望んだ教育成果や学習姿勢を引き出すこと難しいでしょう。これが学生の中退防止を全国規模で推進していく上で今後の大きな課題です。教員も職員も保護者も企業も、学生がブラックボックス化しているところに問題は発生しています。IR（学生情報の提供）や FD/SD（読解力）の力強い推進が望まれます。

NPO 法人 NEWVERY 理事長
日本中退予防研究所 所長

中退とは何か？



学生のブラックボックス化